

ギデンズのコント研究

— 実証主義批判の展開 —

宮 本 孝 二

キーワード：ギデンズ，コント，実証主義，構造化理論，
二重の解釈学

はじめに

第1節 コント研究と社会理論の構築

第2節 実証主義批判としての構造化理論と二重の解釈学

第3節 認識の総過程と実証主義批判

おわりに

はじめに

ギデンズのコント研究を取り上げる本稿は、筆者が2014年に開始した研究プロジェクト「ギデンズと社会学者たち」の第6作目にあたる¹⁾。社会学史の始まりに位置するオーギュスト・コントについて、ギデンズは最初の単著であるGiddens (1971=1974) 以来、70年代の構造化理論および階級論や国家論の構築の過程における諸著作の各所で言及しており、Giddens (1982: 68-75) に収録されたコント論「実証主義の主唱者オーギュスト・コント」を経て、Giddens (1987=1999) での散発的な言及に至るまでコン

1) これまでにウェーバー、デュルケム、マルクス、ゴフマン、イギリス知識人を取り上げてきた (宮本, 2015a, 2015b, 2016a, 2016b, 2017)。

ト研究を継続した。

本稿では、まず第1節において、70年代から80年代にかけての階級論や国家論、そして構造化理論の構築の過程における諸著作の各所で言及されたコントをめぐる議論を紹介し、その諸論点を整理したい。その結果、ギデンズのコント研究がギデンズ社会理論の構築と連動していたこと、そして認識論・方法論の展開が二重の解釈学の提唱に終始していたことが示されよう。

次に第2節では、ギデンズの認識論・方法論についての議論を再確認するために、前述の論文「実証主義の主唱者オーギュスト・コント」の内容を紹介し、そこでのギデンズ自身のコント研究の総括と、1976年の『社会学の新しい方法規準』における実証主義の批判および二重の解釈学の提唱とを比較し、二重の解釈学にギデンズが適切に組み込むことができなかった認識論・方法論にかかわる論点を明らかにする。

そして最後に第3節において、ギデンズが十分に整合性を示すことなく提示した実証主義批判の論点を再検討するために、認識それ自体を見直す認識の総過程論を提案し、実証主義批判の帰結としてギデンズが導出した構造化理論と二重の解釈学の認識論的方法論的位置づけを明示するとともに、ギデンズが提示しながら認識論・方法論として十分に整理できなかったパラダイム論、相対主義批判、適合性の問題、解釈学の意味などを相互に関連づけ、各論点の内容を一層掘り下げ、二重の解釈学の中に適切に組み込むことを試みたい。

第1節 コント研究と社会理論の構築

ギデンズを有名にした最初の単著が、資本主義という変動を基軸にその認識に向けて苦闘したマルクス、デュルケム、ウェーバーの著作を解説したGiddens (1971=1974)であった。その中の特にデュルケム論でコントへの言及が見られる。Giddens (1971:65=1974:82)によれば、デュルケムの思想的立場への重要な影響力をフランスの知的伝統が及ぼし、特にサン・シ

モンとコントが提示した近代化の解釈、すなわちコントの実証的段階とサン・シモンの産業主義とを結合することがデュルケムの生涯の中心テーマとなった。Giddens (1971 : 68=1974 : 85) では、デュルケムのドイツ哲学研究に触れて、当時のドイツ思想、とくに道徳理論において展開されている内容はすでにコントが先取りしていたとデュルケムが述べていたことを示す。Giddens (1971 : 71=1974 : 87) でも、デュルケム自身がコントから最も深い影響を受けていると述べていたこと、その立場からドイツの思想や理論を論評しているのものであって、ドイツ思想の輸入によって自らの立場を形成したのではないと主張したことが明らかにされている。Giddens (1971 : 72=1974 : 88) では、デュルケムの『社会分業論』の批判対象はイギリス功利主義的個人主義だけでなく、コントに由来する「社会秩序の永続的維持には強固な道徳的一致が見られることを強調する考え方」でもあり、その考え方は伝統的社会類型には当てはまっても、近代の複合社会には適合しないとデュルケムが主張したと述べられている。Giddens (1971 : 89=1974 : 105) では、デュルケムの方法論がコントの科学発展論の批判に基づいていること、さらにコントのように究極因という観点で社会変動を説明するのは目的論につながってしまうとデュルケムが考えていたことをギデンズは指摘している (Giddens 1971 : 91=1974 : 107)。またGiddens (1971 : 116=1974 : 135) では「一言で言うと、古い神々は老いて死んだが、他の神々はまだ生まれていない。だからこそ、コントの試み、すなわち人工的に過去の憶念を呼び覚まし宗教を組織しようとした試みは無駄となった。生き生きした礼拝が可能になるのは、死んだ過去からではなく、生命それ自体からなのだ。この不確実で混乱した状態は永遠ではなく、新たな理想が発露してくる。いずれは人類の指針となる新たなものが生まれる創造的沸騰の時が来るであろう」というデュルケムの言葉が紹介され、最後にGiddens (1971 : 133=1974 : 155) でウェーバーとデュルケムの方法論研究を対比して、後者がコントよりさらに遠くまでさかのぼる実証主義の伝統にゆったり浸っていたが、ドイツ社会思

想界にはそのような伝統は欠落していたと指摘している。

階級構造論を追究したGiddens (1973 : 23=1977 : 13) では次のように述べられている。新しい科学に社会学という名称を与えたのはコントであるが、実質上の始祖はサン・シモンであり、その思想は二つの系列で展開された。第1にコントの実証主義と、それに由来しデュルケムを経て現代の産業社会論に至る系統、第2にマルクスとその後継者により形成された資本主義分析、資本主義批判の系統である。さらにGiddens (1973 : 282=1977 : 297) では、近代の新しい時代を特徴づけた二つの革命形態、政治革命と産業革命に集約される18世紀末の一連の大きな社会変革が始まってから、人間社会の主要な闘争や亀裂が最終的に収束される時が来ることを人々は願っていたが、そのようなヴィジョンはサン・シモンやコントの著作に表明され、最大の影響力あるものとしてマルクスの著作があると述べ、Giddens (1973 : 294=1977 : 309) では、社会組織自体に対する技術的合理性の適用によって人間社会の合理化を完結させることが社会主義の目的であるという考え方は、社会主義思想と自然科学を著しく類似させることがあり、サン・シモンやコントの思想や哲学の実証的部分だけを発展させ、新しい組織国家における規制と統御だけを強調することを容認する社会主義者は存在しなかったが、社会主義と科学的合理主義を同一視して社会主義に科学的妥当性を付与する傾向は残ってしまったと論じている。

70年代半ばにギデンズは実証主義研究を深化させた。その最初の成果がGiddens (1974) であった。それはギデンズが編者となって、実証主義批判の諸論文を収録したもので、ウェーバーの他に、現象学的社会学のアルフレッド・シュッツ、エスノメソドロジーのハロルド・ガーフィンケル、フランスのアラン・トゥレーヌとピエール・ブルデュー、そしてユルゲン・ハーバーマスやヘルベルト・マルクーゼらフランクフルト学派の論稿も収録されている。ギデンズが執筆した序論は、冒頭でコントを簡単に紹介するだけで、すぐにコント以後の実証主義および実証主義批判の系譜の総括に入り、

それを三つの論点、すなわち自然科学の方法論の批判、法則化ないし一般化論の批判、認識の前提にある価値・利害論の展開で整理している。自然科学の方法論の批判では主観性や意味の問題に焦点を合わせた理解社会学の系譜があることを紹介し、法則化の議論の批判では人間の主体性を強調したトゥレーヌらの行為・運動の社会学等が紹介され、そして価値・利害論では科学的認識といえどもその前提には認識する主体である人間の価値意識や利害関心があることを強調するフランクフルト学派が紹介されている。

構造化理論と二重の解釈学を提唱したGiddens (1976=1987) では、まず、本書の副題である「理解社会学への共感的批判 (a positive critique of interpretative sociologies)」の「共感的」がポジティブであることの理由が説明される (Giddens 1976 : 8 = 1987 : 4)。意味理解に焦点を合わせた議論を理解社会学と概括するギデンズは、それらに対して共感的でありつつ、その難点の建設的批判を目指すのだが、その立場をポジティブ批判と自称し、それがコントからの継承であると明言する。実証的とも訳されるポジティブであるが、本書では実証主義に批判的な理解社会学の立場に立って、建設的に新しい方向を目指そうとギデンズは考えたのである。

Giddens (1976 : 12-3 = 1987 : 7-9) ではコントとマルクスの対立的なとらえ方が有力であるにもかかわらず、その共通点が、社会における人間行動の研究にも科学が拡大適用されていくことを、人間の人間自身に対する理解の漸進的進展の直接の成果とみなしている点にあると指摘する。この理解の進展はコントによって科学の階統制として把握され、諸科学の展開の結果、社会学が登場するという論理的序列、歴史的序列が示されたのである。神秘性を排除し、科学的知識により人為的統制、すなわち「人間がみずからの社会的存在の諸条件に関する正確な理解によって、みずからの運命を合理的に決定すること」を可能にするとコントもマルクスも考えていたのである。また、Giddens (1976 : 15 = 1987 : 12-3) では、コントもマルクスも啓示的な社会科学を目指したが、現在、社会学は日常の用語体系で完全に熟

知られていることを専門的用語で着飾らせているだけだと批判されているといった問題状況を明らかにした。さらにGiddens (1976 : 130-1 = 1987 : 186, 188) では、コントとマルクスの著作においては、社会生活の科学は人間の精神を宗教的ドグマや、習慣的で無反省な信念から完全に開放すると位置づけられていたこと、自然科学において確立された論理形式の説明図式の社会の自然科学が成立するという知的伝統が彼らから始まったことが指摘されている。そしてGiddens (1976 : 153 = 1987 : 221) では、コントからデュルケムに至るまでの、またある種のマルクス解釈からマルクス・レーニン主義の決定論に至るまでの展開の筋道が象徴するような、19世紀社会思想の悲哀が存在すること、それは人間を拘束している条件の解明による人間の解放という意図が客体としての人間存在の再発見に終わるといふ悲哀であること、しかしながら人間は予測によってその実現を可能にしたり予測が実現しないようにできることなどが述べられている。なお、Giddens (1976 : 128 = 1987 : 184) では、ギデンズの構造化、すなわち構造の再生産という概念がコントから現代の機能主義に至るまで一貫している静態学と動態学の区分を超えるると主張されていた。

60年代後半から70年代半ばまでのギデンズの諸論文を収録したGiddens (1977 = 1986) でもコントへの言及は多い。Giddens (1977 : 9-10 = 1986 : 2) には、自然科学と社会科学との関係についてのコントの実証哲学の三つの特徴が、社会科学は自然科学をモデルにすること、社会科学においても中立的事実と照合しつつ理論は検証可能であること、社会学は有機体を対象とする体系的科学であることとまとめられ、そのような特徴が機能主義や論理実証主義に継承されたと指摘され、コントが神学的思考や形而上学的思考と実証主義的思考は両立不可能であり、科学的探究の課題は脱神秘化、すなわち伝統や偏見を経験的に検証された認識に置換するところにあると考えていたと述べられている。

Giddens (1977 : 15 = 1986 : 8-9) では、今日の社会科学における「社

会発展と社会変革の問題」においてサン・シモンに発する産業社会論がコント、そしてデュルケムを經由して現代にまで到達していることが明らかにされ、Giddens (1977 : 25 = 1986 : 20) では同じく「批判としての社会科学の位置」において、コントもマルクスも科学は技術の道具であり、人間の自由を拡大し、自由は必然性の認識であると考えたと述べられているが、この種の議論を社会科学に拡大したコントの誤りも指摘されている。因果法則の知識から生まれる予見可能性と自由との関係は自然科学と逆で、人間は知識的主体として、自らの社会的存在の諸条件を探究するが、予見可能性を絶対視してしまうと社会学は人間の不自由の科学となってしまうからである。

Giddens (1977 : 29-89) の「実証主義とその批判家たち」の序節に当たる部分とそれに続く2節、「オーギュスト・コント：社会学と実証主義」(Giddens, 1977 : 31-6) および「コントの影響力：論理実証主義の起源」(Giddens, 1977 : 36-44) がコント論である²⁾。そしてコント論に続いて、「論理実証主義と現代経験論」、「実証主義哲学と現代社会学」、「ポスト実証主義的科学哲学」、「フランクフルト哲学における実証主義批判」、「自然科学の哲学への註解」、「自然科学と社会科学」が順次論じられ、結局は自然科学モデルの批判に帰結するものの、認識の前提となるパラダイムや価値・利害関心にも言及されている (Giddens, 1977 : 44-89)。

Giddens (1977 : 121 = 1986 : 54) では、コントの社会学は機能主義であったが、コントは宗教の神秘化を脱して人間的自由を達成する計画を保持していたものの、結果として高次の理性、宗教の再発見に終わったと指摘している。

デュルケムのコント批判についてギデンズは次のように述べている。Giddens (1977 : 215 = 1986 : 164) では、デュルケムの社会学の骨格形成に

2) この論文が『社会理論の現代像』に訳出されていないのは、当時これだけを単行本として刊行する予定が別の出版社にあったためであるが、それは未刊のままになっている。なお、この論文はGiddens (1995 : 136-98) に「コント、ポッパ、および実証主義」と改題されて再録されている。

はサン・シモンとコントの著作は不可欠で特に『実証哲学講義』に影響を受けていたが『実証政治体系』の神政政治的社會説にデュルケムは全く賛同していない。また、Giddens (1977 : 219-20 = 1986 : 169) では、コントが思弁的哲学の罫から脱することができず、実証的になりきれず、三段階の法則は経験的研究からの導出ではなく、歴史に無理におしつけているものだというデュルケムの批判が紹介されている。また、デュルケムはコントの実証的特性を新しい形態で継承しようとし (Giddens, 1977 : 232-33 = 1986 : 184), デュルケムの著作はコントやサン・シモン以前にまでさかのぼりうるフランス実証主義哲学の伝統に根ざしており、コントはサン・シモンとともに、自由主義と保守主義の不安定なバランスを体現し表現を与えている (Giddens, 1977 : 237 = 1986 : 188-9) と述べている。さらにGiddens (1977 : 239 = 1986 : 190) では、デュルケムはサン・シモンとコントを比較して、産業社會論の始祖としてのサン・シモンを高く評価し、伝統的社會の統合要因としての強力な集合意識が近代社會にも必要だと論じたコントの誤謬を指摘する。しかし、近代社會が産業に由来する複雑な分業に基礎を置くだけでなく、道徳的な統制、そして國家の一般的な道徳的方向づけが不可欠だと主張した点に両者の共通性を見ている。最後にGiddens (1977 : 291 = 1986 : 248) では、デュルケムが社會学をコント的な実証主義を概念的に改造しつつ生み出したこと、コントは思弁的な歴史哲学から手を切ることは出来なかったがデュルケムは実証科學の方法に則して研究を展開したことが述べられている。

1979年の『社會理論の最前線』でギデンズは、コントのイデオロギー批判について言及している。イデオロギー論の冒頭でギデンズはコントを取り上げ、コントがイデオロギーに批判的であったが、そのイデオロギーとは形而上学であり、急進的な社會変革、進歩をもたらそうとする思想であり、コントは進歩を目指すのが秩序との調和を実証主義的に求めたことが指摘されている (Giddens, 1979 : 165-6 = 1989 : 181-2)。また、Giddens (1979 : 182 =

1989：200-1) のイデオロギー論の「基本的問題」において、啓蒙主義から生まれたイデオロギーをコントが拒否したのは、それが個人主義的であったからだけではなく、実証的な方法による克服の対象であったからであり、コントはイデオロギーの合理性、脱神秘化には同意するものの社会学がイデオロギーの次の段階に来るべきものと見なしたと述べている。さらに Giddens (1979：184-5 = 1989：204) の「イデオロギーの考え方」においてギデンズは「科学とイデオロギーの関係を論ずるには、啓蒙主義やそれがコントに与えたインパクトとに再び立ち返るのがよい。理性は偏見に代替すべきもので、コントもまた啓蒙思想家同様、理性の優位は科学の支配を意味していた。科学は自然世界の認識を脱神秘化したように、人間社会の理解も行なわねばならない。」と述べ、コントはマルクス同様、科学が伝統や習慣に具体化されている信念、すなわち偏見や先入見や非合理性を正せると考えていたと指摘したのであった。

そして Giddens (1979：237 = 1989：260) では、社会学の「正統的合意」が機能主義と自然主義であり、その系譜の原点にコントは位置づけられ、コントからデュルケムを経て機能主義へ、そして自然科学の発展をもとに自然科学をモデルにした社会学を構築しようとする流れが生じ、それらの機能主義と自然主義が産業社会論に関連し、機能主義は生物学的成長ないし進化のメタファーによる変動モデルと結合し、それはコントの提唱した秩序ある進歩と親和的であると述べられている。

80年代に入って、コントが表題になった論文が発表された。それが Giddens (1982) に収録された「実証主義の主唱者オーギュスト・コント」で、ギデンズはこれを自らのコント論の決定版と位置づけており、Giddens (1996) にも「オーギュスト・コントと実証主義」と改題されて再録されている。ギデンズのコント論の一応の結論として自然科学モデル批判が提示されているこの論文については、第2節で詳しく紹介しよう。

1984年の『社会の構成』(Giddens, 1984：1, 229-30, 232, 349, 361 =

2015 : 27, 264-5, 268, 390, 403) では、コントは進化論的発想と機能主義的思考の持ち主として位置づけられ、社会の自然科学の樹立を目指したとして批判されている。

1985年の『国民国家と暴力』(Giddens, 1985=1999)では、3箇所でもコントへの言及が見られる。Giddens (1985 : 32=1999 : 44)では、コントの三段階の法則という社会変動論は進化論的変動モデルの一種であると指摘し、それはマルクス主義も同様であるとする。それではギデンズの変動論はというと、国家や階級や運動の諸パワーが絡み合いつつ進行するコンテインジェントな変動であるとする。次にGiddens (1985 : 335=1999 : 381)では、コントとマルクスの共通点は知識が人間を救うというところにあり、社会変動の法則を把握すれば人間は変動をコントロールできるようになり、予見が社会変革を可能にするというのが両者に共通の主張であると指摘する。そしてGiddens (1985 : 338=1999 : 385)では、歴史の認識が人間に自らの運命の管理を結果的に可能にするというのがコントの考え方であり、それはマルクスも同様であると述べられている。

1987年に刊行された『社会理論と現代社会学』のハーバーマス論では、ハーバーマスが取り上げる認知発達の段階論がコントの三段階の法則に一致すること(Giddens, 1987 : 231=1998 : 311)、次にアルヴィン・グールドナー論において、コントが文化資本論の創始者だとグールドナーが論じていることが示されている(Giddens, 1987 : 264-5=1998 : 351)。グールドナーによればコントは資本の起源を労働に求めるが、労働こそ商品生産を可能にし、生産には情報が不可欠だからである。また、Giddens (1987 : 259=1998 : 345)では、コントが科学による社会改良を目指したこと、すなわち科学を通じて、経験的な方法の適用によって低位の人々の救済が可能になるとマルクス主義が考えたようにコントも科学によってより良い生活が達成されうるだけでなく、達成見込みの確実性も増大すると考えていたことが示され、機能主義批判論文(Giddens, 1987 : 29=1998 : 47)では、社会学は

自然科学をモデルとするというコントの主張は、パーソンズの構造機能主義によって継承されているが、それに対抗する諸流派が登場し、新たな理論的総合に向けて動き出していることが指摘されている。そしてGiddens (1987 : 55=1998 : 82) では、コントは社会物理学という名称を選んだように物理学をモデルとしたが、同時に生物学に基づく有機体モデルも登場し、そこから機能主義が発達したことが述べられ、Giddens (1987 : 69=1998 : 102) では、人々の誤った認識を訂正するために社会学があると考えられているが、社会学は行為主体の意味づけ、すなわち解釈を再解釈するのであり、その再解釈が行為主体に解釈され行為に影響を与えるという二重の解釈学が成立すると主張している。

以上のように、ギデンズにとってコント論のキーワードは実証主義批判である。ギデンズが批判する実証主義の原点にコントは位置づけられる。実証主義から機能主義へという一般理論、実証主義という認識論・方法論、コントのいわゆる実証的段階に対応する産業社会論という現代社会論といった主要三領域の系譜を批判的に総括し、ギデンズは一般理論として構造化理論を構築し、認識論・方法論として二重の解釈学を提示し³⁾、全体的社会理論すなわち現代社会論として階級論・国家論を構築したのである。本節で紹介したギデンズのコントへの多数の言及は、それら三領域に分類することができ、その中で最も多いのは認識論・方法論についての議論であった。しかし、機能主義を批判する構造化理論も、産業社会論を克服する階級論・国家論も多く著書によって構築され提示されてきたが、認識論・方法論についてのギデンズの本格的な著書はGiddens (1976=1987) 以外にはない。また、認識論・方法論こそ実証主義批判の中心に据えられるべきにもかかわら

3) 宮本(1998)ではdouble hermeneuticsを「二重の解釈学」とし、宮本(2009)では「二段階の解釈学」としていたが、現在では「二重の解釈学」が定訳となつていられると思われるので、本稿ではそれを採用した。なお、「二段階の解釈学」は日本のギデンズ研究の創始者で1979年に亡くなった市川統洋の訳語であった(市川、1978)。

ず、それへの言及は自然科学モデル批判と二重の解釈学の提唱にとどまり掘り下げ不足は否めない。そこで次節ではギデンズの認識論・方法論の展開を再検討し、そこにどのような残された問題があるかを明らかにし、第3節でその解決に取り組みたい。

第2節 実証主義批判としての構造化理論と二重の解釈学

本節では、まずギデンズのコント論の総括と位置づけられる「実証主義の主唱者オーギュスト・コント」(Giddens, 1982: 68-75)の内容を紹介し⁴⁾、その帰結がやはり自然科学モデルの批判と二重の解釈学の提唱であることを確認し、次にそれらの議論の始まりであった『社会学の新しい方法規準』(Giddens, 1976=1987)を再検討し、人々の実践する解釈を解釈し表現し、その表現された解釈が人々によってさらに解釈されるといった論点にとどまらない認識論・方法論の重要な論点が示されていたことを明らかにしよう。

Giddens (1982: 68-75) は、まずコントの著作と人生を紹介することから始まる。『実証哲学講義』は6巻本であるが、その後半の3巻が社会物理学である。コントの特異な性格と奇妙な人生にもかかわらずそれはまともな著作であり、1830年に第1巻を出し、10年以上をかけて全6巻を完成させた。真面目な重厚な著作をまとめる過程で、1817年以来コントはサン・シモンの弟子であったが1824年に喧嘩別れし非難しあう関係になった。最初の結婚生活も1824年に終わり、それと平行して狂気に陥った時期もあった。しかし情緒不安定さは『実証哲学講義』には現れず、自然と社会についての均衡のとれた書物であり、その成果によってデュルケムを経て機能主義に至る系譜の原点となった。コントはまたマルクスにも匹敵し、マルクス主義の流れに対抗しうる存在ともなった。政治革命がもたらした危機、産業主義の到来という問題意識をコントはマルクスと共有していたし、自然科学は人間

4) 1993年に第2版のGiddens (1993=2000) が刊行され、新たな序論も追加されているが、本文の改訂は見られない。

の自己了解であり自然の脱神秘化であるという自然科学観も共有していた。

次にギデンズは、コントの議論の要点を紹介する。コントの有名な科学のハイアラーキー論は、歴史的には三段階の法則として示されるが、分析的には科学の発展は一般性が減少していき、複雑性が増加していく傾向にあるとされた。そして、下位の科学を踏み台にして次の科学が発展するのであり、物理化学から生物学へ、生物学から社会物理学すなわち社会学へ、という段階になるのである。三段階の最初は神学的段階であるが、それはキリスト教で頂点に達する。その想像的段階の次に形而上学的段階、そしてその後、科学的理解が生まれ実証的段階となる。神学的段階においてはうごめく靈魂の实在が認識され、それが形而上学的段階では抽象的存在となり、それを経て科学的認識が発展する。このような長期的変化を、コント自身は狂気の時代から自らの変化として追体験したようだ。『実証哲学講義』は人間思想の科学による変容を分析するだけでなく、それを完成させることであった。人間理解は当時まだに前科学的だったからである。社会物理学ないし実証哲学は秩序と進歩をテーマとして、革命的形而上学やカトリック保守主義の復古派と対抗した。革命派は進歩を目指すものの、統治を破壊し秩序を崩壊させた。また、カトリック復古派は秩序を重視するものの、その秩序は封建社会にすぎなかった。コントは両者を否定し、秩序なくして進歩なし、進歩なくして秩序なしと主張したが、秩序重視であることは間違いなく、カトリック復古派の唱えるモラル・コンセンサス（道徳的合意）や権威を重視し、そこから宗教色を脱色しようとした。また、平等というイデオロギー的妄想とも敵対したのであった。

実証哲学ないし社会物理学をコントは社会学と命名したが、それは同時代のケトレの社会物理学と区別するためであった。社会的世界をコントロールする科学としての社会学は、人間知性の進化の必然的帰結と位置づけられ、社会に法則を見いだすことを目指すモンテスキューやコンドルセが先駆者であるとコントは見なした。コントは普遍的法則が社会現象を貫いていると信

じ、それを発見し利用することによって秩序と進歩を実現できると主張した。そのような法則的認識は人間の行為の自由や道徳的尊厳と矛盾せず、それらはむしろ合理的自己知識によって強化されると考えたのであった。

コントの影響はフランスでは衰えたが、イギリスの哲学者J.S.ミルに大きな影響を与えた。ただし、コントの後期の著作である『実証政治学体系』あたりから影響力は低下し、さすがのミルも「偉大な知性のメランコリックな墮落」と言わざるを得ないほどだった。前期の代表作『実証哲学講義』にはコントの破滅的な個人生活や狂気を帯びた個性の刻印はほぼ見られなかったが、後期の著作『実証政治学体系』は合理主義とはかけ離れていた。また、未亡人クロチルド・ド・ボーとの出会いと死別、その後の人類教の提唱、実証主義教会の樹立、その教祖となったことには、冷静な合理主義とはかけ離れた情動的な宗教的意識しか見られなかった。

1881年のロンドンでの人類教の祭典後、人類教は減じ、実証主義も衰退したが、影響は残った。コント前期の著作はデュルケムの社会学方法論研究に批判的に継承されたのである。コントは社会の科学を目指したが実現できなかったと総括され、デュルケムはコントの三段階の法則は実証されていないと批判的であり、ミルはコントの実証哲学は証拠の完全性とは無縁であると指摘し、コントは歴史哲学を越えようとしてそこに巻き込まれてしまったと見ている。

コントの議論の要点と特色を以上のように指摘したギデンズは、次にコントの『実証哲学講義』からデュルケムの『社会学的方法の規準』へという系譜を明示する。それは社会の自然科学の確立を目指す流れであり、社会的事実を客観的存在として、歴史分析と機能分析を分離し、静態学と動態学を区別し、社会学は社会の病理（不統合）を治療し健全な状態（道徳的秩序）を実現するために努めるべきだという主張である。

またコントの問題意識をギデンズは次のようにまとめる。実証哲学は、否定的批判としての革命的形而上学を批判し、社会の肯定的建設的な批判を目

指した。コントの実証哲学講義では科学の発展が社会の発展の前提でありモデルである。それではコントの進化論的科学論と、進化を革命に変換した現代の科学哲学との関連はどうかというと、両者の差異は大きい、それはコントが見ていた世界ないし現実と、現代世界のそれとの距離ではないだろうか。コントの懸念は道徳的混乱にあり、そこで科学への信頼が鮮明になった。科学こそ、道徳秩序を解体せず封建主義哲学にとってかわる道徳哲学を提供し、宗教や哲学に替わり真理の唯一の基準となり、人間の存在条件をコントロールできる手段を生み出す。コントの理想は、科学が道徳を実現することであったが、合理化すなわち伝統の解体が道徳的エトスを生み出すことは現在になってもいまだ実現していない。

こうしてギデンズは結論部に至って、自然科学モデル批判を展開する。社会学は自然科学ではない。脱神秘化、幻想打破を目指す自然科学だが、社会学を自然科学にしようというのは幻想だ。行為理解を妨げる幻想や偏見を剥ぎ取るという社会学像は成立しえないし、三段階の法則も含めていかなる普遍的法則も発見されていない。しかもそれだけではない。社会学と自然科学の違いは先入見や習慣、常識との関係にも見られる。自然科学にとって、常識を信じている素人は抵抗するかもしれないが常識は訂正可能である。それに対して社会学では、常識を学術用語で再解釈するのである。社会学なしで人間は社会を創造している。人間は知識能力の主体であり相互に理解し合い、そのような主体が社会の構成要素となっている。そのような社会を解明する社会学研究が啓示的であるためには、コントやデュルケムの系譜では困難である。しかし、その影響力は強く、主体を客体化してしまう理論的立場はまだまだ根強い、それに対抗しうる社会理論を創出していかなければならない。

以上のようにギデンズのコント論の総括は自然科学モデル批判に帰着していた。法則論的科学の否定であり、人々の解釈を解釈する二重の解釈学の提唱であり、解釈の解釈による行為の変容がもたらす法則への影響の重視であ

る。そのような立場をギデنزはすでに『社会学の新しい方法規準』(Giddens, 1976=1987)で提唱していた。しかし、そこでは二重の解釈学が提唱されるとともに、それにはとどまらない認識論・方法論も展開されていたのである。

第1節でも述べたが、その副題「理解社会学の共感的批判」に示されるように、それは広く理解社会学とよばれる流派を取り上げ、その主張を検討することから始まる⁵⁾。解釈学、現象学、日常言語哲学、エスノメソドロジーなどである。それらの主張の共通点としてギデنزが指摘するのは、第1に、社会的世界が能動的な人間主体による意図的な、したがって有意味な行為、相互行為によって生産されること、第2に、そのような社会的世界が意味的に構成されるがゆえに、人間にとって理解可能、説明可能となるのだが、それは主として言語によってであること、第3に、そのような理解や説明はまず当事者たる日常生活者によってなされ、社会学者はそれらを再解釈しているということ、である。

理解社会学は、主観主義的な社会学とか意味の社会学などとも称されるように、意味づけによって構成される主観的な世界を重視するのだが、ギデنزはそこにいくつかの難点を見いだす。それは、第1に、言語や意味を人間の行為、すなわち実践の媒体として、存在論的に把握する観点が弱いこと、第2に、主観的な動機や意味を偏重し、物質的活動が視野から欠落しやすいこと、第3に、人間の実践がマクロな制度や変動と関連づけられている局面をとらえていないこと、第4に、実践が社会を再生産するだけでなく変革し生産するという局面をとらえていないこと、などである。

ギデنزは、理解社会学がパーソンズ流の機能主義を規範主義として批判するには共感するが、その際に制度論的な視点をも捨て去ってしまうと批判する。また、理解社会学は、意味の流れ、すなわちコミュニケーションと

5) ここでのGiddens (1976=1987)の内容紹介は宮本(1998:31-8)に基づいている。

いう側面で社会をとらえようとするが、現実を変革するという視点が抜け落ちると批判する。行為、すなわち実践が、その帰結として現実になんらかの変化をもたらさざるをえない、というのが変革の基本的あり方なのである。まさに行為は意味解釈や意味表現とともに、存在する諸資源を行為の手段とする資源動員であり、その帰結として現実を変えざるをえないのである。

こうして『社会学の新しい方法規準』は、いわゆる主観主義的な社会学である意味学派の社会学と、それと対立するパーソンズ流の機能主義的社会学との両者をもつそれぞれの一面性を批判し、マルクス社会理論あるいはマルクス主義的な観点を導入することによって、利害、コンフリクト、パワーを組み込んだ社会理論を構築することを試みる。理解社会学は規範体系である制度的な秩序、パワー、闘争の問題に弱く、パーソンズ流の機能主義は意味や主観性の問題や闘争に弱い。意味や主観性を重視しつつ、マクロな制度やそこにおけるパワーと闘争を理論枠組みに組み込もう、というのがギデンズの立場である。構造は相互行為のありかたを規定し、あるいは可能にする条件であるとともに、相互行為によって絶えず生産され再生産されるという構造の二重性が成立し、相互行為と構造が相互に規定しあうという理論枠組みが、三つの側面で成立する。第1に、解釈図式を媒介にして、相互行為にコミュニケーション、構造に有意味化が設定される側面、第2に、資源を媒介にして、相互行為にパワー、構造に支配化が設定される側面、第3に、規範を媒介にして、相互行為にモラルティ（Giddens, 1977: 81-95=1989: 87-103においてサンクションに改訂）、構造に正当化が設定される側面である。これらの三つの側面はどのような行為、相互行為にも含まれており、相互に他を成立させ合う関係にある。主観主義が焦点とするコミュニケーション、機能主義的社会学が焦点とするモラルティとともに、社会関係すなわち相互行為を構成する側面の一つとしてパワーが導入されたのである。ただし、マルクスやマルクス主義の重視とはいっても、パワーは基本的に行為能力とされ、階級支配や階級コンフリクトと必ずしも結びつくわけではない一般的な

概念として設定されていた。

以上が理解社会学の批判的総括と構造化理論の構築の要点であるが、『社会学の新しい方法規準』には、理解社会学の検討と構造化理論の提唱だけでなく、認識論・方法論の重要な論点についてのギデンズの立場が表明されていた。すなわちその第4章（Giddens, 1976: 130-54=1987: 186-223）では、実証主義のジレンマ、ポパーやクーンによる実証主義批判の展開、科学と非科学の相違（科学的認識の特性、パラダイムの意義など）、相対主義の問題と解釈学的潜入という方法、適合性の問題が検討されていた。しかし、多様な論点が未整理のまま提示されており、これまでに十分に理解されてきたとは言い難い。そして第4章に続く結論部（Giddens, 1976: 155-62=1987: 224-35）において、新しい方法規準をめぐる議論の帰結を、構造化理論と二重の解釈学に集約してしまったため、第4章で提示された認識論・方法論の多様な問題は二重の解釈学によって総括されたと誤解される余地を残してしまったのである。

もちろん二重の解釈学に意義がないわけではない。二重の解釈学が成立するのは、社会理論の対象となる社会現象を構成する人々が、すでにその現象をなんらかの程度は解釈しているからである。人々はいわば実践的理論家なのである。したがって社会理論は、人々の解釈を再解釈するという作業を行う。ただし、人々の解釈に従うということではない。人々の解釈を踏まえながらも、専門的な視点からする専門的概念を駆使した解釈によって、両者は相互に影響し合い変換し合うといつてよい。意味の枠組みは、専門的な社会理論の場合もあれば、対象となる社会現象を構成する人々の意味世界の場合もある。したがって社会理論がなんらかの法則を示すものであるとすれば、それはその対象となった人々の知識となり、それによって実践が変化し、法則自体が変化することもある。社会理論が基本的な法則から体系的に構築される命題体系の形をとれないのはそのためである。さらに社会理論が本来的に批判的特性をもつことも見逃されてはならない。社会理論が社会生活を構

成している人々の意味づけ世界への介入ともなるからである。日常的な意味が専門的概念による解釈によって変換されるのは、いわば意味が反省的に解釈されることにほかならない。それが人々を拘束する意味世界から人々を解放することもあれば、人々の意味世界をイデオロギー的に支配することもある。

二重の解釈学の意義は以上のように大きい。しかし、それが認識論・方法論のすべてではないし、前述のように未整理とはいえギデンズが認識論・方法論の重要な問題を提起していたことを見逃してはならない。二重の解釈学は、コントの法則論的視点の限界を克服する立場として位置づけられるが、それについては一層掘り下げるとともに相互に関連づけられねばならない重要な論点が存在していたのである。次節では、その議論を整理して一貫性をもった理解を可能にする試みを、認識そのものの全体的な過程を見直すことによって達成したい。

第3節 認識の総過程と実証主義批判

認識とは人間が対象を知ることであり、認識の総過程自体もまた認識の対象となる⁶⁾。それは認識対象についてのデータの収集から、その分析、分析の結果獲得される認識成果とその表現に至る過程のことである。認識対象となる現象についての認識が成立するためには、現象を構成している要素を確定し、要素間を関連づけねばならない。現象からデータを収集し分析し、諸要素と要素間関連を意味づけることが認識である。そのために必要なのは、まず認識対象となる現象と同様の現象についての前提的認識である。それなしにはデータ収集と分析によって要素、要素間関連を適切に把握できない。

ここに対象の選択→データ収集とデータ分析→対象の認識（対象を構成する要素とそれらの関連の確定）→前提的認識との照合による前提的認識の維

6) 認識の総過程論は宮本（1991）で初めて提唱し、宮本（2009：221-9）で一層の展開を図った。ここでの議論の展開は宮本（2009：221-9）に基づいている。

持強化あるいは増補改訂→認識の表現→知識として流通という認識の総過程が想定される。表示の便宜上、認識の後に前提的認識が置かれているが、実は前提的認識が存在して初めて認識過程は出発する。この前提的認識が広義のパラダイムである⁷⁾。これはデータ収集において認識に作用し、要素の選択に影響を与える。同時に、データ分析において要素の確定、要素間関連の確定に作用する。そして、データ収集とデータ分析を経て、最終的に前提的認識が維持強化されたり、全面改訂されたりするのである。

以上のように認識の総過程は、大きく三つのカテゴリー、すなわち方法論、前提的認識、知識の存在様式に区分することができる。方法論はデータ収集とデータ分析の方法についての自覚的反省的な認識であり、前提的認識は広義のパラダイムであり、知識の存在様式は表現され社会を流通する認識である。ギデンズの二重の解釈学は認識の表現とその解釈という知識の存在様式に焦点を合わせた議論であり、それが認識論・方法論のすべてではない。二重の解釈学が認識論・方法論として成立するためには、何よりもまず解釈学を方法論として位置づけることが必要であり、そうすることによって方法論としての実証主義を根本から批判する重要な知見が得られると思われる。

方法論としての実証主義とは、データ収集とデータ分析によって検証され証明された仮説のみを真理として承認する立場である。論理実証主義のように厳密な仮説の演繹・検証を主張する立場であれ、経験的実証主義のようにデータを帰納的に積み上げて命題を導出する立場であれ、この点では同一である。したがってデータが客観的に獲得できない対象や仮説は認識から排除され、認識対象は、社会現象を構成する行為の客観的な過程とその帰結や条件に限定される。実証主義は客観的意味連関、因果連関に焦点を合わせるか

7) 狭義のパラダイムは個々の対象についての前提的認識のさらに基盤にある一般的で全体的な意味の枠組みであり、宮本(1998)ではそれを基礎的存在論と命名し、ギデンズの構造化理論を基礎的存在論として位置づけた。

らである。

それに対して反実証主義の代表とも見なされる解釈学は、認識対象の意味理解、すなわち、行為主体が意味しているところを理解することの重要性を強調する。経験的にデータが獲得しにくい意味の世界を対象とする立場は、たしかに実証主義に反する。しかしながら、反しているのは認識対象の選択を指示するパラダイムにおいてであり、対象理解においてではないことに注意すべきだ。解釈学が方法的に直観、内観、洞察などを強調する点では、実証主義とは対立するように見えるが、実は両者の方法はまったく異なっているわけではない。

実証主義と解釈学は、データ収集・分析や対象選択の強調点に、すなわちパラダイムに差異があるだけで、認識の方法としては基本的レベルにおいて同一である。すなわち、いかなる対象の認識においても、対象の認識モデル（対象を構成する要素の確定とその関連づけ）を形成し、それを対象と比較検討しつつ、より適合的な認識モデルの形成を目指すからである。これこそが実証的態度である。認識対象とはまったく無関係に認識モデルを形成することは不可能であり、多少とも実証的に対象と認識モデルが比較検討され、認識モデルが修正されるという認識過程は、主観主義の解釈学であろうと客観主義の実証主義であろうと同一である。認識において遂行されているのは、この実証的な作業にほかならないのである。

実際の社会学的な認識は実証的に、すなわち、対象についての認識モデルの設定、データとの突き合わせによる認識モデルの適合性の検討、認識モデルの対象それ自体への漸次的接近という過程で行われてきたとすれば、この認識過程は解釈学でも同様である。方法論的には、いかなる認識も実証的であらざるをえないのだ。いかに直感、内観、洞察であることを主張しようとも、それは前提的な認識と対象からのデータが組み合わされた以上のような過程を経ているのである。認識の課題は「対象についていかに適合的な認識モデルを構成するか」に尽きる。そして、認識モデル形成においては、まっ

たくの白紙状態が前提にされることはありえず、必ず何らかの前提的認識ないしパラダイムが作用している。

こうして実証主義と実証的とが区別されること、あらゆる認識は実証的でありうることが確認された。解釈学の目標も認識一般と同様、認識対象と認識モデルの適合性の確保にはかならない。ギデンズは解釈学の意義を理解と説明の区別を超越するところにあると理論的実践としては気づいていたようだが⁸⁾、理論的言語として明示的に表現するには至らなかった。しかしギデンズは実証的が実証主義になってしまう場合に注目し、認識論・方法論について重要な論点を取り上げることができた。すなわち、主観的データの価値を認めず客観的データのみで固執する客観主義、絶対的真理の成立に固執する反相対主義、前提的認識ないしパラダイムの存在を無視する視点が成立する場合である。Giddens (1976=1987) がパラダイムや相対主義について議論を展開したのはそのためである。

実証的な認識が実証主義に陥らないためには、一面的な客観主義を排し、相対主義を堅持し、前提的認識ないしパラダイムの意義を重視することが求められる。そこに認識が真理に限りなく接近しうべき道が開かれるが、絶対的真理は成立しない。その根拠は次のようにまとめられる。

第1に、認識対象の複雑性に完全に対応した認識は不可能であることが、認識の基本的前提とされる必要がある。認識されない要素を対象は含む。そのため知識を超えた部分が残るし、その知識に基づく予測は外れることがあるし、その知識に基づいて決定された行為は、意図せざる帰結をもたらすことになる。もちろん、これは社会理論に限ったことではない。自然科学もそうである。だからこそ両者とも、対象についての認識モデルを漸進的に作成する過程を必須不可欠なものとする。成立する真理はすべて相対的なのであって、客観的真理は絶対的には成立しえない。

8) Giddens (1976 : 54-70 = 1987 : 72-97) では理解 (解釈学ないし主観主義) と説明 (実証主義ないし客観主義) の区別の超越が示唆されている。

第2に、具体的な個々の認識成果は、現象についての個性的な記述であり、類似の現象を比較検討することによる一般化は可能であるにしても、個々の現象の個性の差異、あるいは時間的推移による変化は、一般的命題（法則）定立を困難にする。自然科学の対象は社会現象に比べて個性の差異の程度が低いので、自然科学においてはこの困難さは少ないが、社会現象は一見類似した現象でも複雑な要因の関連によってその独自性を示すし、対象自体が歴史的に変化するので、社会科学は一般化の努力を捨てることはできないにしても、自然科学のように唯一の方向とするわけではないのである。

第3に、認識主体のもつ前提的認識に潜む価値判断や利害関心が認識に及ぼす影響についてであるが、それは自然科学においてすら認められるものであり、社会理論においては比較にならぬほどそれが大きいことである。それについて自覚的か否かにかかわらず、その価値判断は認識に作用するので、知識は価値中立的ではありえない。そして、その価値判断には無意識的条件も加担していることに注意すべきである。

以上のように絶対的な客観的真理は成立しえず、たんに相対的な客観的真理、相対的に主観的な真理しかありえないとしても、相対主義に安住することは許されない。それらを克服する道を歩む必要がある。第1に、現象の複雑性に対応した対象についての認識的モデルの形成、第2に、一般化の努力、そして第3に、前提的認識への反省である。しかしながら第1や第2の道は非常に困難な認識作業であるし、第3の道にはまた、次のような別種の困難もある。

いかなる認識も前提的認識に作用されているので、それに反省的に対処することが必要である。反省なき認識成果が真理を主張するとイデオロギーに墮する。したがって、いかなる認識も多少ともイデオロギー的であることを自覚しなければならない。そこに不可欠なのが、とどまることのないリフレクシブな認識を遂行するという立場である。

また、相対主義の克服のために、もう1つの大きな課題がある。媒介と統

合の課題である。多様な視点は、したがってまた認識成果は、相対主義的な並列、対抗状態に置かれている。それが放置されたままでいいわけではない。それぞれがよりよい知識へと接近する努力を重ねるとともに、それぞれの知識は相互に批判し合い包括し合う努力、あるいは、相互の関係を明確化し全体を見通すなかで自らの相対的な位置を確定する努力を重ねる必要があろう。これこそGiddens (1976 : 161 = 1987 : 233-4) が唱える解釈学的潜入にほかならない。

以上、コントを原点とする実証主義を批判するギデنزの認識論・方法論の要点を、認識の方法としての解釈学と認識目標としての適合性の問題、前提的認識ないしパラダイムの重要性、相対主義の難点を克服する解釈学的潜入の不可欠さとしてまとめてみた。前節で紹介したギデنزが『社会学の新しい方法規準』第4章において曖昧な形で提起していた論点は、実証主義と実証的を区別することができさえすれば、一挙に体系的な議論として整理することができるのである。そこに以下のように一貫性をもった論理的展開を見いだすことができる。

実証主義は、現実の観察が常に前提的認識に影響を受けている限界を持つことを無視せざるをえず、完全な実証には永遠に到達できないため、ポパーは反証主義を唱え、完全な実証は不可能だが、反証可能性を示すことができれば実証に準じた評価を与えようとした⁹⁾。しかし、クーンはパラダイム論で前提的認識の重要性をあらためて指摘し、とくに基礎的存在論ともいうべき基本的なパラダイムの転換、すなわちパラダイム革命を重視したが、前提的認識としてのパラダイムが反証主義の立場も危うくすることが重要である。パラダイム内部でしか反証主義は成立しえないからだ。それを越える問題には反証主義では対応できない。そして科学と非科学の区別は、何よりもまず超自然的実在の排除による科学的認識の始まりによって明確になった。

9) 科学哲学者カール・ポパーの反証主義とトマス・クーンのパラダイム革命論についての検討はGiddens (1976 : 135-144 = 1987 : 194-208) に見られる。

排除できなければコントの言う神学的、形而上学的段階の認識にとどまる。そのパラダイム革命以後、科学的認識が展開したが、その内部でも複数のパラダイムが成立してきた。それでは異なるパラダイムは両立不可能なのか。いわば絶対的な相対主義が成立するかといえばそうではない。むしろそうあってはならない。パラダイム同士は相互の解釈学的潜入によって融合が可能となる。なお対象を解釈する際、対象と認識の適合性の成立を目指さなければならぬが、それは認識一般に共有されるべき目標なのである。

ここでコントの提唱した「実証的」の意味を振り返ってみよう。実のところ、第1節で紹介したようにコントへの言及は多いにもかかわらず、「実証的」の意味については、Giddens (1976: 8 = 1987: 4) で「共感的」ないし「建設的」と述べるだけにとどまっていた。しかし、本稿が到達した視点からすると、そこにコントの実証哲学の可能性と限界が一層鮮明に見えてくると思われる。実証的という視点に現実的、確実な、正確な、相対的、有用な、建設的などという六つの意味をコントは付与した¹⁰⁾。コントの社会学ないし実証哲学は、神学的段階の超自然的實在や形而上学的段階の想像的理念的實在を排除することに重点が置かれていた。それが現実的、確実な、正確な、ということである。現実の対象を、確実なデータによって分析し、正確に認識する。それは実証的な立場ではあったが実証主義ではない。実証主義はそれ以外の認識の方法論を容認せず、しかもそれによって真理を獲得できるという立場である。コントは実際には、パラダイムないし基礎的存在論として三段階の法則という一般理論ないし全体理論を提唱しており、それはデュルケムが批判していたように厳密な実証主義によってもたらされた認識ではない。その点では皮肉なことに、コントは実証主義に制約されていたわ

10) コントの原典を参照することは筆者には不可能であるため、これについては1993年に有斐閣より刊行された森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』の「実証主義」および「実証哲学」を参照した。なお、「実証主義」はサン・シモン研究の第一人者であった森博、「実証哲学」はフランス社会学研究の大家である宮島喬が執筆している。

けではない。しかもコントは、実証的という立場の意味を、相対的、有用的、建設的とも表現していた。実証的に認識された内容は相対的真理として位置づけられねばならないと、コントは明示していたのである。その立場を貫くならば、無原則な相対主義となってしまうのではなく、相対的真理であることを自覚しながら、問題解決に有用で社会の進歩と秩序を両立させうる認識に少しでも近づけるように努力しようという主張につながっていくはずのものだ。その点ではコントは、認識論的方法論的に間違っておらず、また前提となる価値判断や利害関心を「有用な、建設的な」と明示したことは、フランクフルト学派の実証主義批判を先取りしていたとも見ることができ¹¹⁾。さらには、三段階の法則も基礎的存在論として位置づけられ、相対的に評価されるならば、その他の一般的理論、全体的理論と相互に参照しあい解釈しあい一層現実適合的な認識に接近する道をコントは開いたとさえ言えるだろう。コント自身がその道を踏み外し、ありうべき相対主義的立場を維持できなかったのは事実であるが、コントの提唱した実証的という立場は今日でも重要性を失っていないと思われる。

おわりに

ギデンズのコント論の展開から見てきたのは、三つの流れであった。コントの実証主義を原点とする機能主義に至る流れ、実証主義を原点とする自然科学モデルの認識論・方法論に至る流れ、そして実証主義に対応した産業社会論の現代的バージョンに至る流れである。そしてギデンズは、これらに一般理論として構造化理論、認識論・方法論として社会学の新しい方法的規準、現代社会論としてパワーを重視した階級論および国家論を対置させた。しかし、社会学の新しい方法的規準については、ギデンズが提唱した二重の

11) フランクフルト学派の実証主義批判についてギデンズは、Giddens (1974) の序論、および注2で紹介したGiddens (1977=1986) 所収の「実証主義とその批判者たち」で展開している。

解釈学だけが認識論・方法論のすべてと考えられてしまい、ギデンズが提起した重要な論点が二重の解釈学十分に組み込まれないまま放置されることになった。ギデンズ自身は80年代から90年代にかけて、構造化理論の充実、そして新たな近代化論ないし現代社会論の構築に向かっていたのであった。それが間違っていたわけではなかったが、認識論・方法論の重要な論点が掘り下げられ相互に関連づけられることなく放置されてしまったのである。本稿では、放置された論点を明確にした上で、二重の解釈学の表面的意味にとどまらない認識論・方法論の全体像を浮き彫りにすることができ、同時にギデンズのコント論において「共感的」に限定されていたコントの「ポジティブ（実証的）」の意義を再評価することもできた。コントの「ポジティブ」には、実証主義の源流ということにはとどまらない別の可能性も秘められていたと言えよう。

参考文献一覧

- Giddens, A., 1971, *Capitalism and Modern Social Theory*, Cambridge University Press. (=1974, 犬塚先訳『資本主義と近代社会理論』研究社。)
- , 1973, *Class Structure of Advanced Societies*, Hutchinson. (=1977, 市川統洋訳『先進社会の階級構造』1977年, みすず書房。)
- , 1974, *Positivism and Sociology*, Gower.
- , 1976, *New Rules of Sociological Method*, Hutchinson. (=1987, 松尾精文ほか訳『社会学の新しい方法規準』而立書房。)
- , 1993, *New Rules of Sociological Method*, second ed., Polity Press. (=2000, 松尾精文ほか訳『社会学の新しい方法規準[第二版]』而立書房。)
- , 1977, *Studies in Social and Political Theory*, Hutchinson. (=1986, 宮島喬ほか訳『社会理論の現代像』みすず書房。)
- , 1979, *Central Problems in Social Theory*, The Macmillan Press. (=1989, 友枝敏雄ほか訳『社会理論の最前線』, ハーベスト社。)
- , 1982, *Profiles and Critiques in Social Theory*, Macmillan Press.
- , 1984, *Constitution of Society*, Polity Press. (=2015, 門田健一訳『社会の構

成』勁草書房。)

- , 1985, *Nation-State and Violence*, Polity Press. (=1999, 松尾精文・小幡正敏訳『国民国家と暴力』而立書房。)
- , 1987, *Social Theory and Modern Sociology*, Polity Press. (=1998, 藤田弘夫監訳『社会理論と現代社会学』青木書店。)
- , 1995, *Politics, Sociology and Social Theory*, Polity Press.
- , 1996, *In Defence of Sociology*, Polity Press.
- 市川純洋, 1978, 「紹介と批評: アンソニー・ギデンズ著『社会学的方法の再構成』」『法學研究(慶応義塾大学)』51巻6号。
- 宮本孝二, 1991, 「社会学における認識論的問題——整理と検討」『桃山学院大学社会学論集』25巻1号。
- , 1998, 『ギデンズの社会理論——その全体像と可能性』八千代出版。
- , 2009, 『社会理論25講』八千代出版。
- , 2015a, 「ギデンズのウェーバー研究——社会理論の中心問題」『桃山学院大学社会学論集』48巻2号。
- , 2015b, 「ギデンズのデュルケム研究——デュルケム社会理論再考」『桃山学院大学社会学論集』49巻1号。
- , 2016a, 「ギデンズのマルクス研究——近代社会の構造と変動」『桃山学院大学社会学論集』49巻2号。
- , 2016b, 「ギデンズのゴフマン研究——構造化理論の体系化」『桃山学院大学社会学論集』50巻1号。
- , 2017, 「ギデンズとイギリス知識人——R.ウィリアムズ, E.P.トムソン, T. H. マーシャル——」『桃山学院大学社会学論集』50巻2号。

Giddens' Studies on Comte's Works : Critical Examination of Positivism

MIYAMOTO Koji

The works of Auguste Comte (1798–1857) who coined the neologism 'sociology' have exerted an extraordinary influence over the development of positivism in social theory. This paper, the sixth one of my project 'Giddens and Sociologists', aims to explore how Anthony Giddens, one of most famous sociologists in the contemporary world, constructed his methodological theory by critical examination of positivism rising from Comte's works, and to find a new way how to solve some problems which have remained unresolved. The main findings are as follows.

First, Giddens' references to Comte's works can be classified into general theory, theory on modern society and methodological theory. Giddens advocated double hermeneutics as the methodological theory against positivism. Second, in the book in which Giddens firstly advocated double hermeneutics, he discussed some theoretical points concerning the methodological theory. Though those were problems of paradigm, relativism, adequacy and so on, he could not arrange them in double hermeneutics. Third, through rethinking the total process of knowing and expressing, we can find a way how to arrange them in double hermeneutics.

Keywords : Giddens, Comte, positivism, structuration, double hermeneutics